

西部教育事務所長，市町教育長聞き取り調査の結果

香川大学教育学部附属坂出学園

1 手続き

附属坂出学園の改革の方向性，「(ア) 一貫した学び」「(イ) インクルーシブ文化」「(ウ) 地域コミュニティ」と有識者会議報告が求める新しい附属の使命「(エ) 教員研修への貢献」「(オ) 幅広い意味のモデル提供」等について説明をし，その必要性について市町の課題や取組と合わせて伺った。また，附属改革に関するアイデアや期待すること等も伺った。(H30.12～H31.1にかけて各委員会を訪問した)

2 聞き取り内容の概要

3つの改革の方向性について，どの市町からも必要であることが具体的に聞き取れた。市町が求めている事柄は，<ア 幼小中連携，異校種合同研修><イ 発達支援，母親の子育て支援><ウ コミュニティスクール><エ 日常の公開，研修機能><オ 幅広い意味のモデル提供><カ 附属の人材育成機能><キ 附属教員像><その他>に整理できた。また，どの市町からも日常からのつながりや自主研修の充実の声が聞かれた。改革に関してのアドバイスもいただいた。以下に具体を示す。

3 聞き取り内容の具体(項目別)

<ア 幼小中連携，異校種合同研修>

○幼小中の連携は一番大切だと思う。現在，中学校の英語教員が小学校へ行って指導しているが，小学校の授業を見て，中学校の授業に変化が見られ出した。互いに理解し合うことはとても大切。異校種間の研修はとてもよい。幼小も同じ。現在小学校教員が1名幼稚園へ1年間研修に行っている。20年後，30年後の教育に生きる。

【附属幼稚園人事枠の拡張】

・附属幼稚園の人事枠は，幼稚園こども園との交流枠があった方がよい。その方が自然だと思う(西部事務所)。

・附属幼稚園との交流枠を設けることは，基本的にはよいと思うが，今は産休等の先生が多く難しい。5年、10年先には・・・(坂出)

○幼小の接続は大切である。子ども園になっても，保育の質は落とさない。

○地域の中に附属があることはありがたい。異校種合同研修を進める。お互いに学び合う場を大切にする。合同運動会はすばらしい。附属坂出学園のシンボリック、象徴する行事である。特支を大切に思う学園であれ。一体感をもってどんどん交流をすればよい。互いに思い合い、激励を

○幼稚園の子ども園化はどんどん進む。すでに，幼保の人事交流も実施している。附幼の「保育を語ろうデー」など子ども園の保育について研修の場があるのはありがたい。異校種の研修や坂綾の合同研修など研修の工夫も大切。

○幼小中の連携推進を一番の教育方針に掲げている。幼小は隣同士にあることから連携がしやすい。県事業でも小学校教員が1年間幼稚園で学ぶ研修が設けられている。竜川小の先生を派遣しているが確実に伸びている。桑原副園長や附幼出身の九郎座指導主事に来て

いただき指導も受けている。小の先生が幼へ行ったりして、小学校低学年の指導案も変わってきた。幼小合同の研修発表会も効果的である。

・小中は表向きには整えている。同じ子が小中と通うのだから現教テーマも小中でそろえている。東中校区、西中校区それぞれの一貫教育パンフレットも作製した。実践の効果はこれから。小中合同研修等をどう組み込んでいくか。

○幼小中一貫教育はとても大切。まんのう町でも教育課程を一本化した冊子を作っている。どんな子を育てることが日本には大切か。自立させるにはどうすればよいか、しっかり考えた。附属も明確な目標を定め、具体化をしていけばよい。

○幼小中の連携、進めればよい。

【こども園】

子ども園化はすでに実施している。学校教育課が指導を管轄、指導主事1名配置した。子ども園をスタートしてからクレームなし。また、小1から中3まですべて35人学級を実施している。

司書教諭も配置している。

○幼小中の一貫教育については、段差を少なくする方向で進んでいるが、ある程度の段差は必要であると考え。ハードルゼロでは、成長しない。小規模の中で育った子供が高校へ行って困る事案もある。ここのハードルは必要だという具体を見せるとよい（連絡進学と一般入学、適度に混ぜ合わせる効果など）。なくすべきハードルとつくるべきハードルの研究を。

一学級の子ども数は、少子化により35人満員に近い学級はほとんどない。少人数クラスでの協働など、これからの過疎の地域課題になる。

【こども園への発信】

子ども園での教育はニーズが高い。どのようなイメージになるのか。質の保証から発信してほしい。

<イ 発達支援，母親の子育て支援>

○虐待等、母親の子育て不安は課題である。子ども課で対応している。発達障害の児童の増加等によりニーズは高い。

○特別支援教育のニーズは高い。これがないと通用しない状況。特学を大切にするとすべての子供が安定してくる。

○現在の管内の教育課題は様々、幼小中の連携、発達障害、生活習慣の乱れ、スマホ、おそね・おそおき・不登校、ネットいじめ、虐待等大変な状況である。母親の子育て支援はもちろん必要。市町の教育長さんも発達障害の困り感は大きい。

○母親の子育て不安は大きな課題、不登校も発達障害も課題、町の講師や支援員をつけて対応している。附属で研究し発信したり、附属が研修の場を提供してくれたりするのはありがたい。附属にも不登校や母親支援の課題があると聞いて驚いた。

保護者対応等の資質も求められている。聞きながらの資質を、カウンセリングは大きなニーズ。発達障害に関してはシートを使って実施している。

○発達障害は多い。支援員も52人から55人に増。特別支援学級入級児童はよいが通常学級の児童が課題。それこそ、附特支と附小が香大を巻き込み出前講座をすれば、すごいニーズである。パワーポイントをつくっておけばよい。何回も使える。

○不登校対応、特別支援対応のニーズが高く、「たむ」「らいむ」等の部屋も開設している。

○発達障害の課題は大きい 保護者への発信等、附属が示してほしい。

○附属が改革を進めようとしている「子育てに不安をもつ母親の支援」や発達障害の課題は、大きな課題である。特に発達障害の問題は数が増えている。学校差もあるがむしろ数が少ない学校にも課題がある。うまく、保護者に伝えられない課題である。発達障害の正しい理解をきちんと保護者に啓発することが大きな課題である。附属学園が通常学級における特別支援を研究するのはありがたいが、公立学校の実態をしっかりと把握して研究を進めないと、公立の困り感とかけ離れた役に立たない研究になる。

<ウ コミュニティスクール>

○コミュニティスクールについて、学校支援ボラや大学等を有効に活用し広げるとよい。

○地域コミュニティセンターの新設に当たっては、寄付をつのる。建物は国に建ててもらい、内装は寄付からなど。

○子ども未来夢基金 10 億の利息で、演劇 500 万、ミズノ運動委託事業 900 万を実施。

・天体観測大仙山ドーム、町営キャンプ場整備。

<エ 日常の公開, 研修機能>

○附属の研究会はしきいを高くしない。香小中研とのタイアップなどでいい授業モデルを見る機会が増えればよい。日常の公開も広く参加できるようにしたらよい。出張に出しにくい状況はある。意識の高い校長ならよいが。研究会は2年スパンでもよい。

【自主研修】

○附属中心の香小中研から同好会が生まれた。これこそが深く授業を考える場である。この場を自主研修の場として大切にしてほしい。今の若手は、パターンに落とし込んで満足している。粘る場がない。これでいいのかと深く授業を見る眼を育ててほしい。模擬授業で進め方を学ぶのもよいが、子供の見方をしっかりと

○附属の現職研修に関する役割については県センターとの共同や分担を明確にすればよい。

○研究会を2年スパンにして、日常の研究授業・討議を充実させるなら、香小研や現教指導に合わせて出前講座を工夫すればよい。附属側からこんな研修ができますよとちらしをつくり売り込む。大学の先生や異校種の先生、OB を巻き込んでもよい。

・若手が増えているので、板書、発問等、授業の基礎基本の講座をつくれれば多くの公立校は現教で取り入れるだろう。附属の授業をビデオにとって使えばよい。公立の先生方を相手に模擬授業形式で研修してもよい。

・現在、「さぬきの授業基礎基本」や「あきたの底力」をテキストとした研修を進めている。

○附属の研修は、魅力のあるものに、大学の先生や外部人材を活用する。

○附属が発信した研究が、何年か遅れて公立校にだんだんと広がっている（例：思考力、ユニバーサルデザイン）。公立・附属・大学の連携が一番大切。地域と仲良く、日常を大切に、情報交換を。困ったら聞けばよい

○公立の現教と附属の研究を結びつける。日常の公開や合同研究集会をしっかりとやる。

亡くなった前岡根教育長はいつもおっしゃっていた「坂出附属は授業で勝負」と、

香小研の研究を作り上げるリーダーとして、附属が公立教員と日常的にかかわることが大切。

<オ 幅の広い意味でのモデル提供、働き方改革のモデル例>

○附中の効率的な部活でよい成績を残している実績は働き方改革モデルにならないか？公立校では難しいか？

○体験的学習活動等休業日の実施は、家庭環境が整ってから。まだ、踏み切れない。

○校長会にも附属へのニーズを聞けばよい。

○教育実習期間は長くすればよい。インターンシップを充実させ公立で使えばよい。初任者でも授業がうまい子がいる。

○働き方改革等の幅の広い意味でのモデル提供進めていけばよい。

<カ 附属の人材育成機能>

○教員の資質向上は大切。現在大変厳しい状況である。30 後半から 40 代のミドル層がない。若手教員を附属で 6 年間でリーダー教員に育ててほしい。現場を守ることが一番で、附属出向は研修の一貫として期待していると思う。

○附属出身の管理職が多く、学校経営がうまくできていることはありがたい。いろいろな立場を踏みながら、リーダーとしての役割を果たしている。人間関係構築の成果であろう。附属はいい人材をつくる役割をもっている。

【附特支の役割】

坂出市は就学委員会等で附属特別支援学校出身の先生方（委員の半数以上）に大変お世話になり、質の高い助言をいただき感謝している。これからもよい人材を輩出してほしい。

○人事に関しては、市町に対して、「地元がしんどい状況でも附属に出してくれてありがとう。ちゃんと地元に戻って活躍している」ことを報告する。

○附属人事の若手教員育成について、しっかり育てて返してほしい。附属出身の人が地元で活躍してくれるのはありがたい。現状を見ながら送りたい。附属から公立へ帰った時の GAP があるだろう。日常から公立とのかかわりを密にし公立の情報を知っておくこと。

○人材不足の時代、優秀な人材を教育実習期間に見極め、新採で雇って育てれば。

学校運営は年齢層のバランスが大切。

○附坂学園の今までの役割。県の教育をリードしている。附属の授業を見て持ち帰る。公立に刺激を与える。どんどんリーダーを輩出してほしい。

附属を出て、管理職になっても、授業ができる管理職に、本質をついた指導ができる管理職になれ。

形式の研究から中身の研究へ、人材育成をしっかりと。小学校は女性教員が支えている。

○附属が多くの指導主事や管理職を輩出していることを示せばよい。今はミドルリーダー不足の時代。30 代後半から 40 代は出せない。若手育成コースを成功させる。新採をとる方法もある。しかし、うまく運営しないと附属を希望する子どもが減る。優れた教育の場を失えば附属の価値はなくなる。あと 5 年すれば年齢構成もうまくいく。

附属は核になる教員を送っていただいているか。教育委員会に頼りすぎるな。附属が本人とつながり、本人をくどく。現教指導、香小研等で人物をよく見る。場合によれば、附属候補者面接を所長だけでなく附属が同席する意気込みで望む。せっかくのチャンスを断らせないように附属も尽力を。

<キ 附属教員像>

○附属のイメージは「えらい、しんどい」、勤務したくなるイメージに。

○附属の先生は自慢しない。自信はもっても天狗になるな。

○昭和 30 から 40 年代が附属の黄金期。附属の考え方を次の世代へ伝えることが大切。教材を知り尽くす。子どもを理解しつくす。これが附属。附属の先生はどこの子供相手でも飛び入り授業ができる。それは、教材を知り尽くしているからであった。当時は教生でも教科書通りの授業はさせていなかった。この先生の授業を見てみたいという附属教員を多くつくれ。

附属勤務 5 年間で教材が分かる教師になれ。授業のノウハウよりも教材理解である。附属の研究テーマばかりを相手にするな。教科の教材に精通した附属教員であれ。附属の授業で自分の名を売れ。と当時の先輩から言われた。

<附属に求めること>

地域の教育力を高める、身近にある附属であってほしい。改革のねらいをどこに定めるのか。何でもかんでもは無理。公立校で具現化できることをしてほしい。やはり、授業をしっかりと。研究会は行って勉強したい雰囲気を、まねてみたいなあと思う授業公開を

【新しい教育課題に対応】

例えばプログラミング教育などにどう対応したらよいか、具体化して発信してくれればありがたい。大学の講師を招くのも一つの手。

<すべてが地域の教育課題>

幼小中の連携、インクルーシブ文化（発達障害）、母親子育て支援、異校種合同研修、地域コミュニティすべて地域課題である。

<改革の進め方>

○附属改革を進めるにあたって、職員の不安をあおってはダメ、決意することが大切。繰り返しながら見直しをしていく。

○よほど大胆に思い切った策で、誰も気づかなかったような改革でないと危ない気がする。

○附属出身の著名人や政治家、香川で勤務した文科省の方とのつながりを大切に

<坂高教育創造コース>

○坂高教育創造コースを人気のコースにし、教員になりたい人を増やす。

○坂高教育創造コースから香川大学教育コースへ、ここの道ができるとよい。

<その他>

・生徒指導と部活の課題も